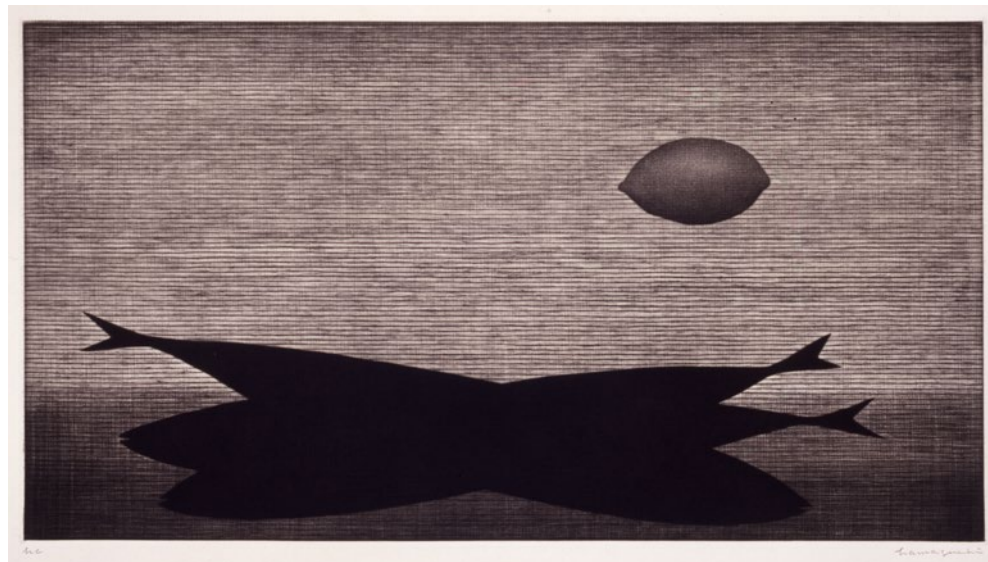
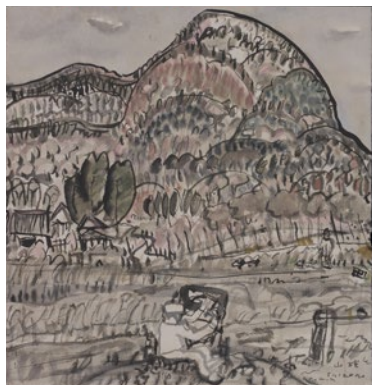


# NANGA

## 新しい南画の世界

— 浜口陽三と後藤理絵、重野克明、染谷悠子、西久松綾、吉増剛造 —

ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション 夏の企画展



表面作品  
 〈上段左〉 染谷悠子 『薄曇りの空のカペラ』 Capella in the Cloudy Sky 2024年 135.0×180.0cm  
 Chinese ink, water color, acrylic, lithograph ink, on canvas mounted on wood panel  
 Photo by Kenji Takahashi ©Yuko Someya, Courtesy of Tomio Koyama Gallery  
 〈上段右〉 吉増剛造 『怪物君』 Dear Monster 2015年 54.5×35.0cm Mixed media on paper  
 © Gozo Yoshimasu, Courtesy Take Ninagawa, Tokyo.  
 〈中段左〉 西久松綾 『煙ノ浦一与一』 Dannoura-Yoichi 2021年 53.0×45.5cm 日本画  
 〈中段右〉 後藤理絵 『蓮の花』 Lotus flower / 詩誌「妃」掲載・自作詩  
 2024年 25.7×28.8cm 雁皮薄口、油煙墨、青墨、金箔  
 〈下段左〉 重野克明 『山桜』 Mountain cherry blossoms 2025年 49.0×47.0cm 和紙、水墨、顔彩  
 〈下段右〉 浜口陽三 『魚とレモン』 Fish and Lemon 1958年 26.5×48.8cm メゾチント

### SPECIAL EVENTS 特別イベント

- 1 トーク 現代における南画  
 詩人・林浩平 × 美術評論家・林道郎  
 7月26日(土) 15:00～ 定員60人ほど
- 2 吉増剛造氏によるパフォーマンス  
 8月2日(土) 15:00～ 定員40人ほど
- 3 林浩平 × 後藤理絵、重野克明、染谷悠子、西久松綾  
 作家トーク+文人風茶会  
 7月13日(日) 14:00～ 定員60人ほど

すべて予約制 先着順  
 6月25日(水) 12:00～予約フォームにて予約受付  
 7月12日(土) 12:00～電話でも予約受付  
 ご参加には入館料がかかります

### 展覧会概要

休館日 月曜日(ただし 7/21、8/11、9/15 は開館)、  
 7/22(火)、8/12(火)、9/16(火) は振替休館、  
 〈下記はイベント開催のため休館〉  
 7/13(日)午後、7/26(土)午後、8/2(土)終日

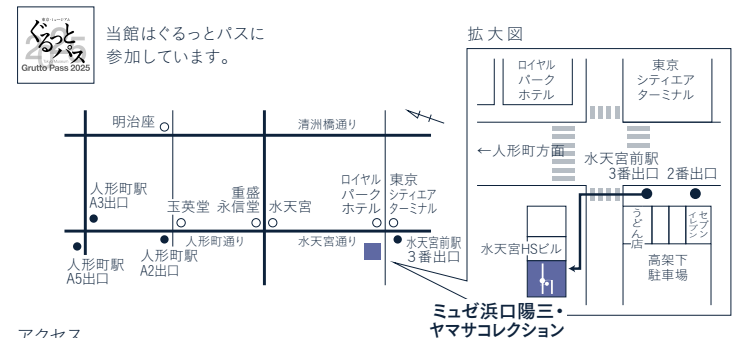
開館時間 11:00～17:00(土日祝は10:00～)(最終入館16:30)  
 ※7/13(日)、7/26(土)は10:00～12:00(最終入館11:30)

ナイトミュージアム：毎月第3金曜日(7/18、8/15、9/19)は20:00まで開館(最終入館19:30)

入館料 大人600円/大学・高校生400円/中学生以下無料

### 会場 ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-7 Tel 03-3665-0251



アクセス  
 東京メトロ半蔵門線[水天宫前]3番出口そば  
 東京メトロ日比谷線[人形町]A2出口徒歩8分  
 都営浅草線[人形町]A5出口徒歩10分



Map English

江戸時代、十七世紀半ばに生まれた南画は、昭和前期まで文化の一大潮流でした。浜口陽三の銅版画作品にも南画の影響があります。この展覧会では、こころみに現代の中に南画をさがします。

美術評論家の洲之内徹は、「浜口陽三の仕事の根底には宋元写生画の構図が横たわっている」と言う。宋と元の写生画とは南画のことである。陽三の父君の第十代儀兵衛は、小室翠雲に師事して南画を学んだ。さらに数代前の浜口灌圃は、紀州の南画家の野呂介石の弟子だった。陽三と南画の世界との親和性は、浜口家の伝統である。詩と書と画、その三つを表現するのが正統的な南画家。文人画家だが、現在、その系譜に連なる作家はなかなか探せない。しかし、南画の伝統を意識しながら、新しい表現を模索する現代美術家や詩人、書家は存在し、活発な活動を続けている。そうした南画のスピリットに照応しあう現代の作家たちの作品を展示すること、「新しい南画の世界」を表現したい。

展覧会顧問 林浩平（詩人、前惠泉女学園大学特任教授）  
2017年NHK放送大学「文人精神の系譜―与謝蕪村から吉増剛造まで」



後藤理絵 / 詩集「Voix」(吉増剛造)より  
2023年 35.0×51.0cm 雁皮薄口、油煙墨、青墨、澱粉糊

## 後藤 理絵

書家・詩人

## GOTO Rie

2004年以降、詩と書によるインスタレーションを国内外で展開。大学時代に学んだ織物や絵画、また俳優を通じ培った身体的な経験などが綿い交ぜになり、幼少期から親しんできた詩と書に還ってきた。

石は硯、煤は墨、草木は紙へ。先人は動物の被毛で筆を拵えた。  
余白を無声の言葉、沈黙、吃音と捉え、わたしは太古の欠片で風景をかく。

1966年 栃木県生まれ  
2021年 明治大学大学院 建築・都市学〈総合芸術系〉修士課程修了

## NISHIHISAMATSU Ryo

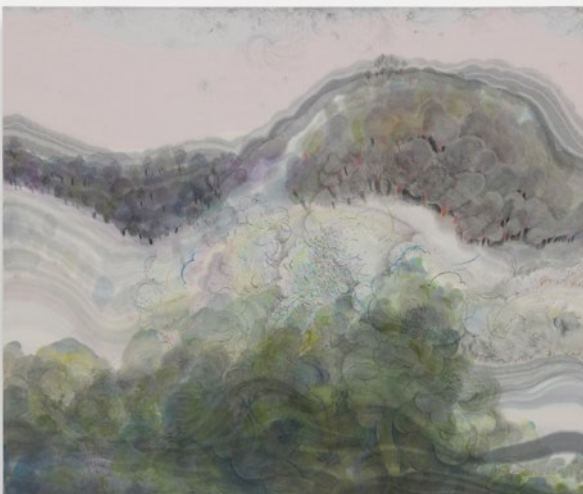


《山城河床曼陀羅》Yamasirokasyōmandara 2023年 116.7×116.7cm 日本画

美術家 西久松 綾

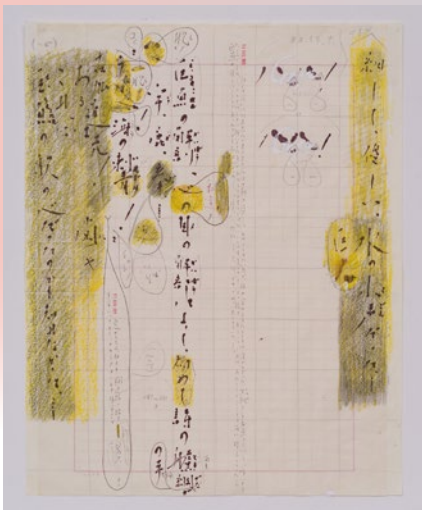
小さな生命の煌めきを観察、研究しています。そこでは様々な個性が共存し、絶妙な緊張感を維持することで大きな調和を生み出しています。日々の観察に伝説や民話等の物語を再構築しながら作品にしています。

1989年 京都府生まれ  
2014年 京都造形芸術大学大学院ペインティング領域芸術表現専攻日本画分野修了  
2016年 第3回 続「京都 日本画新展」大賞  
2024年 第9回東山魁夷記念日経日本画大賞展 入選



詩人

## 吉増 剛造



《Voix》  
2019年 45.0×36.0cm  
Mixed media on paper  
© Gozo Yoshimasu.  
Courtesy Take Ninagawa, Tokyo.

## YOSHIMASU Gozo

『出発』から『Voix』まで60年以上にわたり、22の先鋭的な詩集を発表。詩というものの概念を変えつつあるともいわれる。写真、映像、表現の領域を縦横無尽に往来し、現代アーティストとも称される。

1939年 東京都生まれ  
1963年 慶應義塾大学 文学部国文学科卒業 芸術院会員  
〈主な著書〉1970年『黄金詩篇』(思潮社)(高見順賞)、2022年『Voix』(思潮社)(西脇順三郎賞)、2021年『詩とは何か』(講談社現代新書)  
〈展覧会〉2016年「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」東京国立近代美術館  
2017年「涯テノ詩聲 詩人 吉増剛造展」足利市立美術館/栃木:  
沖縄県立博物館・美術館/那覇;渋谷区立松涛美術館/東京  
グループ展:MOTアニュアル 2019東京都現代美術館、Reborn-Art Festival 2019石巻/宮城など多数。2025年第36回サンパウロ・ビエンナーレに参加予定



《足湯の圖》Footbath 2025年 9.0×39.7cm 和紙に墨・顔彩

## SHIGENO Katsuaki

私は写生に出掛けます。墨と硯と数枚の和紙を携えて。情景の空気、一瞬の感情を定着する為にこれほど相応しい素材はありません。卓上でも使います。空想と現実の曖昧な部分を墨の滲みが言葉の様に表せる気がして。

1975年 千葉県生まれ  
2003年 東京藝術大学大学院修士課程美術研究科版画専攻修了  
現在 茨城県水戸市で制作。  
銅版画に主軸を置きながら水墨画、油彩画、陶芸、手製本を制作している。

## SOMEYA Yuko

「みんな、なんで山を描くんだろう?」美術館に行くと必ずどこかには山の絵があるのです。山の見えない場所で生きてきた私は、この春からなだらかな山あいで暮らし始めました。すると山を描き始めたのです。

例えば墨のにじみを使って、波や花びらなど連続するものを描くとき、そこには幽かで柔らかな空間が現われます。

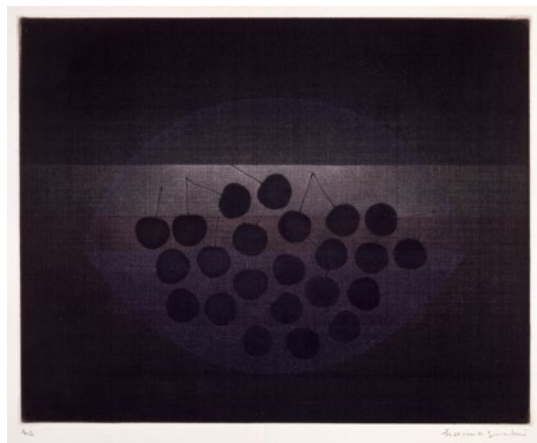
1980年 千葉県生まれ  
2004年 東京造形大学美術学科絵画専攻卒業  
2006年 東京藝術大学大学院修士課程  
美術研究科版画専攻修了

『コウモリはどこにいる』 Where Are the Bats  
2023年 69.2×82.0cm  
Chinese ink, water color, pencil, Japanese paper  
on canvas mounted on wood panel  
Photo by Kenji Takahashi  
© Yuko Someya, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

現代美術家 染谷 悠子

銅版画家 重野 克明

## HAMAGUCHI Yozo



《黒いさくらんぼ》Black Cherries 1962年 19.6×24.6cm カラーメゾチント

油彩、水彩、水墨画などを試みた後、40歳を過ぎて銅版画を表現方法として選ぶ。1955年頃、パリで新しい技法、カラーメゾチントを開拓。その技法を用いた静かな作品が国際的に評価され、20世紀を代表する銅版画家として活躍した。

1909年 和歌山生まれ。父のヤマサ醤油第十代社長、濱口儀兵衛は、南画の収集家として知られ、小室翠雲に学んで自らも描いた。  
1930年 東京美術学校(現・東京藝術大学)を2年で中退し渡仏。  
油彩、水彩、版画などを模索。  
1939年 第二次世界大戦の勃発でやむなく帰国。翌年白倉嘉入に墨絵を習う。  
1950年頃 本格的に銅版画に取り組みはじめる。  
1953年 再びパリを制作の拠点とする。  
1955年 カラーメゾチントという新しい技法を開拓。

銅版画家 浜口 陽三